

だけからは上述のように外国産に近いものがあるが、すべての性質で日本のシバナと一致するものは他にないし、満州産にも疑問があるので、数年前これに *var. stenocarpum* Hara の名を用意したことがある。

しかし外部形態上シバナとマルミノシバナのやや中間と思われる標本が時に本州中部、南千島、樺太、朝鮮などにみられる。また分布も太平洋岸の陸前から三河の間で両者が入り交っている。このような中間形の染色体数を知り、生品について十分観察することが今後に残された点であり、本類における種分化の問題を解く鍵である。しかし私は余りに染色体数に重点をおく種の扱いには賛成できない。

It is clear that in Japan there are at least two races of *Triglochin maritimum* in a wide sense. The northern race is very similar in outer morphological characters to a common form of *T. maritimum* L. of Europe, but it is a high polyploid with $2n=120$ chromosomes. The other race distributed in western Japan, however, has scapes often shorter than soft elongate leaves, and narrow oblong capsules with recurved style and small stigma, and it is, contrary to Löve's presumption, the same as the European one in the number of chromosomes ($2n=48$). Subsp *asiaticum* Kitagawa described from south Manchuria has never been studied cytologically.

○シオマツバの栽培 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Cultivation of Sea Milkwort.

サクラソウ科の多年生小草であるシオマツバ、一名ウミミドリ *Glaux maritima* L. *var. obtusifolia* Fer. はまたシオハコベの別名もあつて、学名も和名も潮の香がするが、産地から考えれば当然のことであるけれども、長く栽培して見ると塩気がなくともよく殖えていく。奥山春季氏の原色日本野外植物図譜第2巻(1960)は余の栽培のものが資料にされているので、栽培が可能であるかどうか半信半疑の人もあつたが、まことにもつともらしい疑問である。ところが、これは全く偽りでない事実である。すなわち今を去る8年前の昭和29年7月秋田県男鹿半島入道崎附近の海水のたまりで採集してきたものを、径15cm位の鳥の餌壺にうえているが、よくはん殖し毎年5-6月には花をつける。別に特別の扱わしていない。つまり一般湿地の植物の培養と同一にしている。水は水道水で塩水などは与えていないがよくふえるので、年に一回位株分けをして土を補給してやる位である。

○フウトウカズラの雄花穂 (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Of the length of a spike of *Piper kadsura* Ohwi. フウトウカズラの雄穂の長さは別に規格があるわけではないが、通常見うけるものは、5-6cm内外であるようである。それなのに本年伊豆の伊東市八幡野にあつたものはその長さ18cmに達していた。